
世界中でたった一人

仁科柚希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界中でたった一人

【Nコード】

N5281D

【作者名】

仁科柚希

【あらすじ】

あたしは世界中でたった一人きりだ。だって誰もあたしの気持ちなんて知らない。そう、誰も……。

第一話 プロローグ1

一人きりで生きていく。あの日あたしはそう決めた。

その日はとても暑くアスファルトからでた陽炎がユラユラと揺れていた。母と父の離婚を決める話し合いの日だった。

離婚の理由はどこにでも転がっていきそうなありきたりなものだ。

父親の浮気。

浮気をされた母親は、すっかり精神の安定を欠いてあたしを虐待するようになった。あたしが八歳になったばかりのことだった。

それまでも、だんだん母が不安定になっていくのが分かって、不安で悲しくて家に帰って来てくれない父が恋しかった。

色々なものがゆっくりと怖くなっていた。

母に虐待され始めてから、急激に父が憎くなった。母が可哀そうになった。

もうあの人に愛される望みなんてないのに。それでもお母さんは狂おしいほどあの人を愛し続けるのね。自分をどこまでも追い詰めるのね。あたしを虐待してしまいうぐらいに。

可哀そうなお母さん。

それに比べてあの人はいわつ！あんなに愛しているのに、他の女を選ぶなんてっ。お母さんを捨てるなんてっ。捨てたくせに、お母さんの心をとらえて離さないなんてっ。お母さんをあんなに縛りつけないでっ。たとえばわべだけのお飾りだとしても、お母さんの夫を名乗らないでっ。あんななんか。あんななんか、もうあたしの父親じゃないっ！

世界で。世界で一番憎いっ！！

自分で自分が壊れていくのが、分かった。

そんな時に父と母が正式に離婚することが決まった。正直なところ、あたしもお母さんもこんな生活はもう限界だった。もう、心身を擦り減らすことはないのだと安心すらした。

離婚ことを知ったときはまさに天の救^{たす}けだと思った。ようやく母は、父から解放されるのだと嬉しかった。でも、時間が経てば経つほど悪い予感でいっぱいになっていった。

話し合いには父の愛人も来ていた。

当時まだ小六と幼かったあたしは外で遊んでこい、と家から出された。だけど外で無邪気に遊ぶにはもう年を取り過ぎていたし、第一、家での話し合いが気になって早々に帰ってしまった。

今でも時々思う。あの時もっと早く家に帰っていたら、あんなことにならずに済んだのかもしれないと……。

刻一刻と大きくなる悪い予感を抱えて、家への道をあたしは走った。

第二話 プロローグ2（前書き）

今回は少しでもグロテスクな描写があります。苦手な方はお気を付けてください。

第二話 プロローグ2

あたしは急いで家へと帰った。

けれどその日はいつもと様子が違った。家の前に立つただけで分かった。

悪い予感 highest 潮に達していた。

確かに、離婚しようとして話している時なのにいつもと様子が同じなはずがない。けれど次元が違ったのだ。

あたしはその時、殺気を感じた。鳥肌が、たつた。

急いで家の鍵を開けて中に入った。

「危険だ」と、本能が告げていた。

そしてリビングの扉を開けた時、あたしは見た。

母親が父親に包丁を振り下ろしているのを。

そのすぐ横に血まみれになった父の愛人が丸まってうめいているのを。

父の血を浴びて紅く染まりながら。

母の顔は鬼の样だった。目が血走って、異様な光を湛えていた。

鬼女だ、と思った。

何も出来なかった。

悲しいとか、怖いとか、そういう感情がすべて吹き飛んでしまったようでも何を感じる事ができなかった。

否、自分は犯罪者の娘になったのだと悟ることしか出来なかった。

どれだけだったのかは分からないが、次に気が付いた時は父の葬式だった。

その日まで一応普通に生活していたらしいが、あの悪夢の日から父の葬式まであたしには一切の記憶がない。

本当に気が付いたら、という感じだった。

でもこの日も親戚中が父母を蔑む声と一滴も涙を流さないあたしに向かつて冷たい娘だ、と陰口をたたく声しか覚えていない。

他には、

「どうせあれには分かるまい」

と誰かが言っていたのも覚えている。

そして、だれがあたしを養うのか、遺産の相続は誰がするのか、と争いあっていた。

父はそれなりに名の知れた出版社の社長だった。

だからそれなりの財産があり、親戚中が媚びへつらっていた。

けれど一大スキャンダルが発覚するや否や、皆一様にそっぽを向いた。

そしてこの場での唯一の正当に遺産を手にする権利のあるあたしを無視して遺産争いを続けた。

誰もがこんな迷惑を被^{ひこう}つたのだから遺産がもらえて当然と考えているようだった。

あたしを養うことはしたくない、けれど遺産は欲しい。まるでハイエナの様だった。

そんな中であたしは、「こんなものか」と思っていた。
所詮人間なんてこんなものか、と。

自らの為だったら、どんなにでも強欲で冷血になれる。そんなものか、と。

このほかに覚えていることは後、マスコミが煩かったことくらいだ。

結局誰も父の死を悼んでなどいなかった。あたしさえも。

家族をかえりみない父をあたしは家族だなんて思っていなかった。
ただ、母を縛り付ける邪魔な人としか思っていなかった。

改めてそうだったんだと思い知った。その証拠に涙の一つもない。
悲しむどころか、憎しみが増してすらいるようだった。これで母の中から父は消えない。未来永劫、何があっても母の世界の中心に居

続けるだろう。

母があたしのほうを向くことは、これで一生なくなったのだ。ただ、その事実だけに絶望した。

親戚中がたたいた陰口は、「冷たい娘だ」というのは当たっていた。亡くなってさえ実の父親を父だと思えないなんて、まだ邪魔な人だと思っているなんて、冷たい娘以外の何者でもなかった。

自らの為だったら、どんなにでも強欲で冷血になれる人間に自分だってご多分に漏れず入っていることをその日知った。

深い深い絶望とともに。

第三話 悪夢と回想

けだるい午後、うつかりうたた寝をしてしまったら夢見は最悪だった。

人生で一番最低な時を抜粋した夢を見た。

「はあ。最近見なくなってきたと思うんだけどな」

ため息とともに独り言をもらすとブランコからおりた。

普通のブランコではなく向かい合ったかたちで、座席が2つついているものだ。大体四人くらいが乗れるようになっていて、最近危険だと多くの公園から撤去されている、あれだ。

その関係でこの辺りには、学園の隅の忘れられた空間であるここにしかない様だった。

あたしはこのブランコが好きだったし、学園の隅の忘れられた空間だから人が来なかった。

だから1人になりたい時にはうつてつけた。

あたしはみんなと一緒にいるよりも一人でいることの方を好んだので、よくここに来ていた。

いわばお気に入りの場所だった。

私立莉玲学園。

東京というコンクリートジャングルにありながらいまだ緑を多く残している名門私立である。

その広大な敷地には幼稚部から大学院までがそろっていて一貫教育が受けられる。

その他の施設も様々にある。

海辺にある豪華な研修施設に、避暑地にある巨大なログハウス。

長野には一流ホテル風のスキー場、アメリカには英語を勉強する為の施設まである。

とてもとても豪華だ。学校の校舎だって、本当にここは学校か！

？と言いたくなるような無駄な豪華さを兼ね備えている。

おまけにもつと豪華な寮まである。この寮も常識を覆すものがある。

まず寮則というものがない。学校側の言い分は、皆さんそこはわきまえてらっしゃるから寮則までには必要ない、ということらしい。実際は良家のご子息、ご令嬢が家と同じ様に好き勝手できるように、ということだ。以前、クレームをつけられたらしい。

廊下は各家のメイドさんが歩いている。そしてメイドがいるからには、メイド部屋も当然ある。

そしてそのメイドたちがルームサービスよろしく部屋へとご飯を運ぶ。

本当にここは学校なんだろうか、と在学生のあたしでさえ考え込んでしまうものがある。最もそんな風に思うのもあたしだけらしいが。まともな神経の持ち主がほぼ皆無なのだ。

唯一学園の隅の忘れられた空間であるここだけがその無駄な豪華さが無い場所だった。

古いけれど綺麗に花の咲きみだれる素敵なお温室。

周りには趣味よく季節の木々が植えられ、お茶を楽しめるようなテーブルとイスの置かれたヨーロッパ風のあずまやの様なものがある。

そしてお気に入りのブランコ。

趣味悪いんじゃないの、と言いたくなるようなこの学校では奇跡的に趣味の良いところだった。

最近新築した校舎とその他諸々は、今の理事長のせいで物凄い成金趣味になっているから、ここだけが唯一落ち着くところだった。

今頃は無駄に長い告辞やら祝辞やらがダラダラと続く卒業式が執り行われているのだろう。

そのせいで校舎内は静かなものだ。

あたしは卒業式なんて、とサボった。

話が長いのだ。かつたるい。

単なる祝辞でもご勘弁願いたいところなのに、単なる祝辞で済んだことは今まで一度としてない。

まずは「私の経験から・・・」とかなんとか言って自分の昔話を語りだす。苦労話かと思いきや自慢だ。

まあ、まだそこは祝辞として認めてあげられなくもない。けれどここで既に１０分から１５分程の時間が大抵の場合たっている。

皆一様に嫌気がさしてくる頃だ。

だがまだこれから本番とばかりに舞台上のアホは喋り続ける。

この学校は名門私立だけあって政府高官や大企業の幹部の出身校であったり、子供が通っていたりする。すると当然彼らが祝辞を話すこともあるわけである。

コイツラだったらまだいい。だがそうなる時はほぼない。何人もいる中に一人でもいればいい方だ。

一番厄介なのは会社の社長や政治家の時だ。

なんとコレの場合自社のアピールをしだしたり、選挙活動を始めののだ。そして最後にとってつけたように「これで私の祝辞は終わらせていただきます」などと厚顔無恥にも言うのだ。

もう何なんだこの茶番は！と、怒鳴りたくなってしまう。

こんな間抜けな茶番に付き合いきれるはずも無く、とつと卒業式や他の行事まであたしはサボり始めた。

取り繕うことも無くなつてから。

小六の夏。

あの悪夢が現実としてあたしにのしかかってきた時。

所詮自分の存在自体が茶番なのだ。この学校にとって。

当時、あたしは大いなるスキャンダルを中心の一人としてマスコミに騒がれた。

学園としてはあたしなんて即刻退学処分にしたかったことだろう。だが、マスコミはあたしを悲劇のヒロインに仕立て上げた。そんな少女を即刻退学処分にしたら、マスコミにたたかれるのは火を見

るよりも明らかだ。

マスコミは時に冷酷に人を傷つける。だが、自らに利がある時は助ける。

本当は助けられたくなんかなかったのに。こんな茶番早く終わりにして欲しかった。どうせ、ここにいたって虐めぬかれるだけなのだから。

苦しくは無かった。全てがバカバカしくて、くだらなくて、心動かされるもの何て無かった。

でも、もうそれも終わる。

もうじき、きっと。

第四話 幻か現か

ポットのふたを開ける。紅茶のいい香りがあたりに漂う。持参していたカップに注ぎ、テーブルの上に置く。そしておもむろに粉薬を取り出した。

毒薬。

ネットを通じ割とあっさりと手に入れることが出来た。粉薬を紅茶にいれる。そしてスプーンでゆつくしとかきまわし、溶かしていく。

死にたかった。

何故、死んでしまおうだなんて思ったのかは分からない。

絶望なのか、憎悪なのか、それとも疲労なのか。

分からない。

分かるのは、自分が死んだら学園も、一族も、マスコミにたたかれ、世間には再び白い眼を向けられ爪弾きにされるだろうことだけだ。

うまくすれば内密に事を収められるかもしれない。

学園縁^{ゆかり}の権力者たちの力を借りられれば。

だが、そうなるとは思えない。

きつと、マスコミに売り渡しさつと縁を切るものが大半だろう。そうなれば学園と一族への立派な復讐になる。

でも、別段憎んでもいなかったから復讐したいだ何て思わない。

けれど。

誰かが。

もし。

冷静に頭のどこかでそんなことを考える自分を嘲笑する。

有り得ない。

誰かがここに来るなんて。

だから、こんなこと、考えるだけ無駄だ。

誰かがここに来たら、あたしを止めたなら死ぬのは止めようとか
いう考えは、無駄だ。

スプーンを置く。

結局、最期まで一人。

世界中でたった一人。

自嘲気味に想う。

ふいに、哀しかったのだと想った。

お母さんに突き放されて、独りぼっちにさせられて。
だから死ぬことを決めたのだと。

でもそれが分かったからと言って変わらない。

死ぬことに変わりはない。

さよなら、と呟き目を閉じる。

ふと、足音が聞こえた気がした。

やめる、と言う声も。

でもどこから聞こえているのかは分からない。

幻か、現実か。

もう何も分からない。

幻か、現実か。

カップに、手をかけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5281d/>

世界中でたった一人

2010年10月8日15時59分発行